

第31回全国選抜高校テニス大会レポート

全国高等学校体育連盟テニス部
常任委員 新居 弘行

<開会式>

博多の森テニスコート。その無数のつぼみたちがまさに開き始めた平成21年3月21日、第31回全国選抜テニス大会が始まった。快晴の15時、開式通知のアナウンスが流れ、選手が入場。緊張のせいかわ少し硬い表情の中にも、1人1人の自信と決意が入り交じっている。今年もまた、春の訪れとともに全国の選手が博多にやってきた。

古賀通生大会会長の「この大会も31回目を迎え全国11万人が参加するまでになりました。それを代表する皆さん、頑張ってください。」という激励に続き、馬瀬隆彦全国高等学校体育連盟テニス部部長の主催者挨拶。「団体戦は学校の名誉のため、個人戦はUSオープン、日中韓ジュニア交流会につながっています。頑張ってください。」選手の気持ちは一層引き締まっていった。

選手宣誓はドリーム枠出場、香川県小豆島高校の大山まどか主将。



「Dreams come true. 私たちの夢が本当にやってきました。」という言葉で始まり、島ならではのハンディを島民に支えられながら克服できている事への感謝の気持ちを語り、最後に「今までたくさんの元気をくれた人たちに元気をお返しすることができるよう、また同じように困難な環境で頑張っている全国の高校生に夢と感動を与えることができるよう、力の限りプレーすることを誓

います。」と締めくくった。

落ち着いた力強い宣誓とその宣誓文は、選手のみならず会場の多くの人に感動を与えた。

30回出場校として園田学園高校が表彰された。

前回30回大会よりピンクリボン運動をスタートさせたが、この1年間で集めた寄付金826,400円がNPO法人乳房健康研究会に贈呈された。

組み合わせは今年もセンターコートでのキャプテンによる公開抽選によって決定された。対戦校が決まるたびに大きなどよめきと歓声が起こり、決戦前夜の盛り上がりは最高潮に達した。

開会式の入場行進の演奏を務めたのは九州女子高吹奏楽部。司会進行は城南高校放送部。また、玄界高校邦楽部が歓迎アトラクションに参加した。このように、全国選抜は多くの高校生の支えによって成立している。

<団体戦>団体戦はシード4校を選び、フリー抽選で組み合わせが決定される。シード校に選出されたのは、男子が湘南工大付(神奈川)・名古屋(愛知)・四日市工(三重)・秀明英光(埼玉)。女子が柳川(福岡)・園田学園(兵庫)・椙山女学園(愛知)・仁愛女子(福井)。

ベスト8に進出したのは、男子、湘南工大付(神奈川)・関西(岡山)・霞ヶ浦(茨城)・名古屋(愛知)・大成(東京)・甲南(兵庫)・東海大菅生(東京)・秀明英光(埼玉)。シード校が初戦で敗退するという波乱もあり、関東5校、近畿1校、中国1校、東海1校と、関東勢の躍進が目立つ結果となった。女子は、柳川(福岡)・宮崎商業(宮崎)・松商学園(長野)・園田学園(兵庫)・椙山女学園(愛知)・福德学院(大分)・富士見丘(東京)・仁愛女子(福井)、九州3校、関東1校、近畿1校、北信越2校、東海1校となり、九州の層の厚さが示された。

男子優勝は、湘南工大付(神奈川)。4年ぶり5度目の栄冠に輝いた。秀明英光との決勝戦は、それまでダブルス2であったヘルナンデス匠が初めてダブルス1で出場。強烈なショットで試合の流れを作り



6-3,6-1で勝利した。シングルス1田川翔太と喜多元明の熱戦はこの

時点でまだ1stセットの途中。2時間

30分におよんだ2人の戦いは、要所

でうまい試合運びを見せた田川が6-7,6-4,6-4で勝利した。

シングルス2の近藤大基と川崎光1stセットは7-5で競ったものの、パスからの切り返しで主導権を握った近藤が続く2ndセットも6-0でものにし優勝を決めた。

甲南(兵庫)はノーシードながら、接戦を次々にものにしベスト4に入った。シングルス1の力が安定しており、今大会の台風の目となった。

女子優勝は、園田学園(兵庫)。5年ぶり11度目の栄冠に輝いた。仁愛女子(福井)との決勝戦、シングルス1は真田涼子対井上晴菜。両選手がっぷり四つに組んだ強気の攻めの打ち合いとなったが、集中力でわずかに勝る真田が7-5,6-3で振り切った。ダブルス1は山崎・大塚組(園田)と中村・丸山組(仁愛)。1stセット仁愛が6-3で取るが、2ndセットは速い展開からきっちり



勝ちポーチを決めた園田が6-0で取り返し試合はファイナルセットへ。ここで仁愛はリターンにストレートをまぜながら、相手の少しのミスにつけ込み、また相手の攻めもうまくかわしながら6-2でものにし、シングルス1とはほぼ同時刻に終了。この時点でポイントは1対1。観客の目はファイナルセットに入っていたシングルス2山本みどり(園田)対菅村恵里香(仁愛)へ。攻める山本、粘る菅村、それぞれの持ち味を發揮した試合は小差で山本がものにした。6-3,3-6,6-4 3時間の熱戦であった。そして続くダブルス2。村上・大塚(園田)対石垣・佐々木(仁愛)の試合はストローク力では互角であったものの、ボレー、スマッシュに勝る園田ペアが6-4,6-0で取り、優勝を決めた。

福德学院(大分)は地域大会5位での出場であったが、全国では接戦を勝ち上がり、ベスト8に入った。

<個人戦>

男子ベスト6は次の選手。

田川翔太（湘南工大付属）・上原伊織（甲南）・中島 啓（龍谷）・遠藤 豪（四日市工）・菊池玄吾（東海大菅生）・喜多元明（秀明英光）。

優勝したのは遠藤 豪。田川翔太との決勝戦は6-3,6-1。我慢強いラリーの中にも思い切りの良いプレーが光り、安定した試合運びで、栄冠を勝ち取った。金山監督のコメント。「決勝ということで相当動きが固くなっていた。しかしそんな状態でもポイントを取れるようになったところに成長を感じる。」。昨年のさいたまインターハイシングルス準決勝。後一步のところでは決勝進出を逃した悔しさをバネに、一回り成長した姿が印象的であった。



女子ベスト6は次の通り。

山崎貴巴（園田学園）・大原かのこ（宮崎商）・今西美晴（京都外大西）・藤原悠里（大産大付）・江口実沙（富士見丘）・井上晴菜（仁愛女）。

優勝したのは江口実沙。決勝戦は力強いサーブ、ストロークを持つ江口と、素早いフットワークで相手に付け入る隙を与えず勝ち進んできた今西との対決となった。江口は強打の中にミスもあり崩れそうになったが最後まで攻めの姿勢を崩さず打ち抜いた。今西も攻めようとしたが一步及ばず、6-1,6-2で江口が優勝した。



<終わりに>

福岡県の高体連テニス部の先生方、およびテニス部の皆さんには、今年も運営を補助していただき、大変お世話になった。個人戦会場を手伝っていただいている折尾愛真高校男子は、今大会の団体戦に出場し、惜しくも2回戦で敗退した。しかしその敗戦の直後、翌日から始まる個人戦準備のために汗を流している選手の姿があった。

「負けて悔しい気持ちはまだあります。けど個人戦の準備は毎年折尾愛真高校がやっていることなので、作業をしながら『ここで行われる個人戦で、うまい人のプレーを見て強くなろう』と、気持ちを切り替えます。」

はにかんだ笑顔でひたむきに語ってくれる姿に、高校テニスの原点を見た気がした。

その隣ではいつのまにか満開になった桜が、明日へ向かう高校生プレーヤーの背中を暖かく、厳かに見守っていた。

